

---

# 刻と世界と狭間の果てに

国見炯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

刻と世界と狭間の果てに

### 【Nコード】

N3609M

### 【作者名】

国見炯

### 【あらすじ】

幼馴染であり従兄弟の天宮慧と迷い込んだ先は異世界。そこで就職してのんびりとした日々を過ごす主人公天宮雫。地味で目立たずに己の知的好奇心を満たせばいいはずの毎日がいつの間にか賑やかに。それでもマイペースに突き進む雫の毎日です。

## 0話・ある男の語り

俺は、自分で言うのもなんだけどもてる。

老若男女問わず、容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群なのに人当たりは良く、面倒見も良い爽やかな俺はもてにもてまくった。

のに。

たった一人、それが効かない存在がいる。

牛乳瓶の底のような分厚い眼鏡　ちなみに度は入っていない  
をかけ、髪は無造作に束ねるだけの同じ年の従姉弟であり幼馴染。  
俺の幼馴染だってだけでやっかみをうける存在だけど、本人は気にせず我が道を爆走するだけ。

目立たない、寧ろ地味で存在など俺が居なければ埋没するだけに見える幼馴染の仮面の下は、実は、俺を軽く陵駕する人外だ。あの従姉弟の家系は全員そうだが、俺の幼馴染はそこにあつてでさえ最強を誇る。

それを知っているのはある一部だけ。

自分の興味をひかれたモノ以外に関わるのが面倒で面倒で、あえて地味で通す幼馴染。でも、本人は気付いていないけど、結構信者

はいたりする。俺のファンをあしらって、というより女なのに俺より男前の所を見せて、惚れたー！って叫ぶヤツが多いらしい。

本人だけが気付いていない所が鈍すぎる。

他は鋭いのに、そういう所だけが計ったかのように鈍いなんて、ある意味詐欺だと声を大にして叫びたい。

ちなみに、これだけ幼馴染の事を俺が言えば勘の良いヤツはわかるだろう。

俺が幼馴染が大好きで惚れまくっているという事に。

そう。

これも、本人だけが知らない事実だ。

まあ、学校じゃばれてないけどな。面倒だし。

とりあえず一般的には頭脳明晰な頭を存分に活かして、幼馴染と同じ大学に入って同じ就職先を選んで将来的には同じ家に住めたらいいな、と策略している俺の願いは別の意味で叶えられた。

あるようであつたくありえない、何処かの小説に出てきそうな設

定。

異世界トリップ。

俺は、その幼馴染とそんなファンタジーな世界へと迷い込んでしまった。

トリップした先で暮らすのは一つ屋根の下。  
城だから遠いけどな。

トリップしたからといって、魔王を斃せつて事はない。

寧ろ、迷い込んだ先は魔界と国交を結んでる友好国認定だそうだ。

まあ…別にあれしろこれしろって事はなく、寧ろ就職まで世話してもらってる。

例外なく、異世界人は特殊能力が備わっているそうで、何処の国でも重宝するらしい。そう考えると、就職先を用意したのは逃がさない為なんだろうな。

ぶっちゃけ、俺は幼馴染と一緒に居られたら異世界だろうか魔界だろうか何処でもいいんだが……。

だけど異世界に来た弊害が一つ。

ある意味最低最悪な事が俺の身に降りかかった。

俺の生命を維持する為の重要な事が一つ。

俺は幼馴染程この世界に適応出来ていないらしく、適応させる為に定期的にある事をしてもらわなきゃならない。  
そしてそれは、幼馴染しか出来ない事。

「慧。日課」

考え事に没頭する俺の耳に、素っ気無いけど心地良い音が飛び込んでくる。

俺の従姉弟であり幼馴染である雫の声。

「……はい、かがんで」

ぐいつと胸倉を掴まれ、強制的に前のめりに倒される。

「……………」

「はい、終了」

触れるか触れないか。

勿論触れてるけど、口付けをしてもらって終了。

そう、これが俺の生命維持に欠かせない事。

雫はこれが終わると、直ぐに自分のやりたい事に没頭する為に籠もる。

だから既に姿はないけれど。

けど、これは流石に勘弁してくれと言いたい。

何が悲しくて、好きな子から生命維持の口づけを定期的にしてもらわなきゃならない。

ある意味ラッキーというヤツがいるかもしれない。が、雫に関し

てはまったく良くは無く、寧ろマイナスだ。

仮に、俺が勢いに任せて告白して無理やりしたとしよう。  
するとアイツはこう言うだろう。

そんなにエネルギー欲しかったの？

と、呆れた眼差しで。

本当に勘弁してくれ。

俺は男で、しかも好きな子に口付けしてもらって喜ばないはずないだろう！

そういう意味はないのは心底理解してるけど、やっぱり反応する所もあって。

若くて健全だから当たり前の反応っちゃ反応だけだな。

でも、してもらった後は虚しくて涙が出そうになるのを、ぐぐぐと抑えて俺は職場へと向かう。

それが、俺の異世界でのちょっと虚しい日常。

## 1話・異世界の入り口

私のもっとうは“地味”。

目立たず騒がれず、影に咲く小さな花のように、気づかれずに通り過ぎられていくだけ。

ああ。なんて嬉しい生活。

家族が言うには、うちの家系は思春期にはこの状態に突入するらしい。

騒がれる事を嫌い、自分の好きな事だけをやって充実させる毎日。

私は末っ子で、家族では私が最後の引きこもり者。

既に対応には慣れていて、家が憩いの場になるのは嬉しい限り。わかってるから煩わしい事なんて言われなし。友達を作りなさい。遊びなさい。勉強しなさい、なんて言われな

い。  
勉強しなさい、はないけれど。

天宮の家系は頭が良い天才肌が多い。

それは私も例外ではなく、教科書は一回目を通せば内容なんて覚えちゃう。

退屈だった。

だから、興味の惹かれるものが出来た瞬間、のめり込んだ。

が、それ以上に青天霹靂な事が私の身に降りかかったのだ。

異世界への迷い込み。

それに対しては、私の従姉弟が大きく関係しているといえるだろう。

「しーずく。雫ちゃん。一緒に帰ればいいじゃん？」

後ろから煩い声が聞こえ、私は遠慮なく無視した。  
声の主は従姉弟の天宮慧のもの。

「今日は予定が入っているはずでしょ？ 面倒だから話しかけないで」

心底呆れたように。

これはヤキモチからではなく、心底面倒くさいから。

慧と付き合った女の子の10人20人捌けないわけじゃないけど、それをやる分私の研究の時間が減らされる。

日替わりで女の子と付き合っては別れて、それらが全てこっちにくる。ただ従姉弟で同じ学年学校というだけでどうして時間を無駄にさせられるのか。

チビ。

ブス。

私と言われる定番のセリフだけど、これしか言う事がないのかと呆れるしか出来ない。どうせなら、ネタになるような頭脳プレーにお目にかかりたいけれど、残念ながら慧関連の嫌がらせで関心させられた事など、ただの一度もない。

「今新しい議題に取り組んでいて慧と話す時間が勿体無い」

一息で言い切る。

だけど慧は気にせず、私の隣を陣取ると口笛を吹き始めた。

「（あああああ。音程が乱れてる）」

聞いていて苛々するが、態々それを口に出すのも面倒。

「（あ。そうだ。今日は楽しい事があった。凍夜兄さんの手料理。この間食べた時また腕があがってたんだよね。同じ遺伝だけど、料理だけは凍夜兄さんに勝てる気はしないんだよねえ。」

そうそう。月子姉さんにレース編みを教えなきゃ。学校で見本品と簡単な説明書を作成したけど、わかるかな）」

慧の事は既に眼中外。

私の頭の中は家族の事でいっぱいになっていた。

そう。今日は珍しく家族が揃う日。この日はかりは研究所から出て、居間でお茶でも楽しもうと笑みが漏れる。

「あのさー、雫」

「まだ居たの？」

忘れてた。

もう帰ったと思ってたのにまだ居たんだ。

吃驚。

「いや、居たけどさ。ホント雫ってさー」

何処か困ったような。

いつも軽薄な笑みしか見てないからその表情にも驚いたけど…お

金に困つたら写真でも撮つて売るかな。お金になりそう。

「何考えた?? 不吉な事考えなかったか??」

突如自分の身体を抱きしめるように、慧が過敏に反応する。

感の良い所はやっぱり従姉弟っていう感じ。

「別に。それより何?」

「あ…ああ。雫って相変わらず…」

それは、最後まで言葉にはならなかった。

迷い人よ。

なんて良くわけのわからない声が響いたかと思うと、突如発生した渦に呑み込まれたのだ。

そして気がつけば、辺りには何も無い真っ白な空間。一緒に呑み込まれたはずの慧の姿はない。

「誰？」

けれど、私の目を誤魔化せるはずがない。  
私の前にある、何かの気配。

「姿を現さないなら遠慮なくブチノメス」

分厚い眼鏡が怪しく光る。

「物騒な。管理人の俺をぶちのめすなんて、狂暴なガキだな」

「管理人？ 職業？ ああ、物語のような格好。で、ここは地球？」

状況確認は迅速に。

現実逃避をした分だけ私の楽しみと研究が遠ざかる。

「冷静な…もう一人の奴とは随分違うな。睨むな睨むな。ここは落とし穴と呼ばれる時空の穴だ。召喚された奴や人生に迷い過ぎてる奴がよく落ちてくるけど…アンタは巻き込まれたんだな」

「100人切り達成間近の慧も悩む事があるんだ」

「100人切りつて……まあ、なんだ。男は一途な奴もいる。じゃなくて、アンタは巻き込まれただけだが、地球って星から存在を切り離されちまった。で、当然帰れない。今はな」

意味ありげに言葉を積み重ねる男との会話も、面倒。  
さつさと終わらせたよね。

「家族にメッセージは出来る？ 行った先での衣食住は？ 後私の荷物や研究所に出入りしたいんだけど、持ってこれる？」

これぐらいかな。聞きたい事は。

「後、行った先で帰る方法は見つかるの？」

うん。地球に帰れるか聞かないとね。

「……法則さえ見つければ帰れるだろ。なんていうか図太いな」

男の心の奥底から搾り出すような声。

「そういえば、お母さんが話してくれたっけ。異世界に行った事があるって。異世界に行く前に男の人にあれこれ頼んだら叶えてくれて、異世界で勇者やって魔王と仲良くなって、異世界ツアーの次元移動魔法陣を入手して帰ってきたって言ってたけど、小説のネタじゃなかったんだ」

面白かったから、いつ小説になるんだろうって思ってたんだけど、実話だったかな。

「それ……」

すると、男の顔が蒼白へと変わる。

「静音っていうんだよ。お母さんの名前」

「ああ。静音か。そうか。子供か……わかった。メッセージは届けてやる。後これを持っていけ。異空間に研究所の中身を移動させておいてやる。それは、入り口の鍵だ。衣食住については大丈夫だろ。繋がった先が、異世界人にとっては良い場所に当たる」

「随分面倒見が良くなるね」

ちよつと呆れてしまう。

「静音は、ここまでだったらまだ来れるはずだ。そう、来れてしまっただ。あの静音が」

「でも、私はここから帰れないんでしょ？」

「……ああ。異世界で切られた存在が修復されるまで、方法を見つけても帰れない」

「あ、っそう。これ、ありがとね」

予想通りの答えに、私はあっさりと会話を打ち切ろうとした。

「静音は元気か？ お前はそっくりなんだな」

感傷っぽい雰囲気は漂ってるけど、これを貰った後で無視するなんて非道な真似は、流石の私でも出来ない。

「元気だよ。お父さんと結婚して、子供は三人。皆元気に過ごしてる。あ、これ写真ね」

お姉ちゃんの手作りのパスケースサイズの鎖のついたロケットもどき。そこに家族写真と貰ったお守りが入ってる。

お父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん。全員お守りをくれたんだけど、それように作ったんだなっていうのがわかる、ぴったりサイズ。

「美人だな…ん？ 美人…？」

男がジッと私を見る。

そっか。お母さんも思春期シーズンは瓶底眼鏡だったんだ。

しょうがないから眼鏡を取り、男を見上げた。

「瓶底は家族皆つけてきたよ。それは似てるけど、顔はそれぞれ個性的で似てないかもね。昔は身長155cm程。私ぐらいね。現在は176cmのモデル体型って言われてる」

うちの家系、女は伸びるのが遅いんだよね。

お姉ちゃんも高校卒業してから伸びたし。

お父さんの遺伝子が強かったのか、178cmでお母さんを越したっけ。

「そんなに伸びるのか？」

あえて瓶底眼鏡の理由には触れない男。

「うん。お父さんが190cmぐらいあったから、それに釣り合いたいって思ったら伸びたんだって」

「……無茶苦茶な遺伝子だな」

「よく言われる」

アマミヤ家の中でも、特に私の家は特別みたい。

父も母も天宮性で、特別な2人が一緒になったら、特別が倍増されてきたとか何とか言ってたような気がする。おじさんが。

「じゃ、お母さんにメッセージお願いね。会った事があるなら説明も楽でしょ」

「ああ……」

眼鏡をかけなおし、私は異世界への入り口に身を投じた。

衣食住の不安はないらしい。

研究所も出入り可能。

方法さえ見つければ帰れる。

そして、家族にもあんまり心配はかけない。

じゃ、ちゃっちゃと行って、帰る法則見つけちゃおう。

この時の私は慧の存在をすっかりと忘れていた。

まぐ。忘れてても同じ場所にたどり着いたから、全然問題なかったんだけどね。

## 2話・隔日の日課

異世界に来てから早一ヶ月。雫たちも今の仕事にも随分慣れた気がしていた。

そして、100人きり達成間近の雫の従姉弟である慧は先日、ついに達成したらしい。ここにきてからの記録は15人という噂が流れていた。

日替わりではないものの、二日毎に女性がふられるという事態の一番の被害者は雫といえるのかもしれない。どうやらここでは地球にいた時よりも、慧と雫は一心同体？だと女性たちからは思われているらしく、逐一女性たちから報告が入るのだ。八つ当たり込みでその都度雫は手を止め、ノートを閉じ、研究所の外へと出る。

大切な大切な大切な研究所の中身。狂乱状態の女性に壊されたらたまったもんじゃないとばかりに。

「はいはい、泣き止んで。ね？ 折角の美人さんが台無しだよ」

身内直伝の台詞。この時は眼鏡を外した方がいいと言われ、雫はとりあえず言われた通りに行動していた。本当に静かに煩わしくなく話しがスムーズに進むのだ。使わない手はない。

「どれだけ泣いたの？ あんな男の為に貴方みたいな可愛らしい人が泣くなんて勿体無い」

白衣のポケットに入れてある小さな瓶を取り出し、コルクを開け

る。その瞬間、辺りを包み込む芳香。

「これ……落ち着く……良い香りね」

取り乱す女性はその後へと座り込み、雫が開けた瓶を見つめていた。

「今日はお風呂に一滴垂らして入ってね。アロマポットはもう買った？」

首を振る女性に、雫はそう、と頷くと、再び白衣のポケットに手をつまむと、球体を掴んで女性へと手渡す。

「これはサンプルだけと、商品と同じ様に使えるから使ってみてね。寝る前にそれに瓶の中身を数滴垂らしてね。そうしたらきっと、落ち着いて眠れるからね」

女性にアロマポット入りの魔道具を握らせると、そのまま優しく門まで送っていきその背中を見送った。

二日前にもまったく同じ行動をしたような気がするが、気のせいではないだろう。

「ねえ、所長。そろそろアロマポット以外の賄賂も用意した方がいいかな？」

音も気配もなく雫の後に立っていた研究所の所長に、ちょっとした相談を仕掛けてみる。ボサボサの髪に伸びた髭から人相や年はまったくわからないが、声からしてそこまで年寄りではない事もわかる所長の事を、雫は結構気に入っていた。

だからこそその相談。

「そうだねえ。次は雫君が言ったオーデコロンってヤツでいいんじゃないかねえ。」

部屋で楽しんだ後は、やっぱり外出先でも良い香りはさせてたいんじゃない?」

「そうですね。小さなスプレー式の瓶でも作って持ち歩きます。さて、時間もないし煮詰めないと」

定期的に替にふられた女性に渡すものを変えて宣伝している辺りが雫たる所以である。今や口コミで広がったアロマポットは様々な国から注文が相次ぎ、開発者の雫の懐には相当の金銭が舞い込んできている。

だが、これは地球とかわらない行動の一つでもある。研究が大好きで発明が大好きな雫の資金は、主に小遣いとお年玉。小さな事からコツコツと。始めは小銭を稼ぎつつそれを段々と大きなものへと変えていく。

地球では特許を取ったものもあるのだが、この世界では一からやり直し。それはそれで楽しいと思うが、流石に雫専用の研究所がなければここまでスムーズにはいかなかっただろう。

その点では、異世界の入り口にいた男に感謝の心は持っておく。

「そういえば騎士団の給料日は今日だねえ。君の従姉弟殿は何を買うのかな?」

突然ふられた話しに、雫は興味なさそうに考え事の片手間で答えておく。

「さあ。家賃を払うんじゃないですか。後は食費とかその他全般生活費」

「…君も大概現実的だよねえ。面白いけど。異世界人は保障されるのに、払う気でのいるの？」

所長の言葉に雫はあっさりと言いた。

衣食住がタダという話しは始めの時点で聞いたが、聞いた瞬間ありえないと思つた事の一つでもある。

天宮家の家訓として、働かざるもの食うべからずというものがある。当然、収入があるなら自分の面倒ぐらひは自分でみる、という無言ではなく有言のプレッシャー付きで、幼い頃から叩き込まれているのだ。天宮家でそれがまかり通るのは、それぞれが稼ぐ術を身につけられるからだろうとは思っているが。

「君、異世界で小遣いを貰う家庭に住んでたんでしょ？ なんてそんなにしっかりしてるのか聞いてもいい？」

興味本位というのはわかったけれど、隠す事でもないのであっさりと言えを口にした。

「小遣いは労働です。働きによって貰える額が決まるんです。バイトが出来ない学校でしたしね」

別の意味でバイト以上の事はしていたのだが、あえてそれを言う必要はないだろう。

「へえ。そりやまたしっかりした家だね。うちとちょっと似てるかもねえ」

「（…笑つた）」

髭とボサボサの髪で判別は難しいけれど、微かに見える瞳が優しげに細められた。笑えるんだと感心しながら、雫は研究所に戻りましょうと所長を連れて建物の中へと入っていく。

その光景をタイミング悪く見てしまった人影が幾つか。

殆どはまったく気にしていなかったのだが、その内の一人、雫の従姉弟である慧は無言のまま持っていた飲み物を地面へと落としてしまう。

「仲……良すぎじゃないか？ あれ……」

地球では雫に近づく存在はいなかったから安心していただけ、異世界では勝手に違う事に漸く気づいた慧。

「仲良過ぎてそりゃー研究員同士だよ？ 仲は良いだろー」

慧の隣を歩いていたら小柄な少年が、呆れた声音で言葉を放つ。今の慧にとってそれは決る様に突き刺さり、思わず反論してしまいうになった瞬間別の声がソレを遮った。

「16人目の彼女が出来た分際で、お前は何を言ってるんだ？」

小柄な少年以上に呆れ というよりは諦めを含んだ声音に、慧の肩が落ちた。流石に的を当てすぎている発言。騎士団の誰もが知っている事実だが、周りの認識と本人の認識は修復出来ない程のズレが存在している。

「付き合っつて言っただって、プラトニックだぜ？ その辺りでお茶をするような感覚だろ」

幼い頃からもてにもてまくった慧の認識は、これだった。

「うわ。すごいね。ホントに本命がいる態度かわからなくなるよねー」

「プラトニックだけでも思えないがな。まあ、本命に相手にされない状態で欲求不満なんだろ」

「……おいおい。なんつー発言かましてんだ？」

だが、内容までは突っ込まない。

「心当たりはあるんだな」

尚更呆れられた様子に、慧はほっとけとばかりにソッポを向くと、落とした飲み物を拾い上げ、2人に背を向けたかと思うとさっさと歩き始めた。

「都合が悪い話しなんだねー」

「まあ、そうだろうな」

慧の後ろの方で2人が何かを言っているが、慧は気にせずに歩き続ける。

「そういえば最近……生命維持の回数が減ったよなあ」

始めは一日一回。数日後には三日に一回になり、その数日後には一週間に一回になった。

宮廷魔導師の見解としては、生命維持が必要でなくなる日はこない、という事らしいが……

「辛いけど、少ないのも悲しいよなあ」

なんて、後ろを歩く2人には突っ込まれそうだが、本気でそんな事を呟いていた。

### 3話・騎士団と研究所

騎士団と研究所。

まったく関係のない部署に思えるが、この国では合同練習が存在する程親しい間柄。

合同練習といっても、騎士団の演習を研究所職員が椅子に座って見るといった内容だったが、月に一回行われるという恒例行事になっている。

「所長、ここでいいですか？」

そんな中、自身の研究の手を止めている雫の機嫌は最悪的で、分厚い眼鏡で表情を伺う事は出来ないものの、にじみ出る威圧感で全てを表していた。だが、所長と呼ばれた男は気にした素振り一つ見せずに頷く。

「大丈夫ですよ。雫さん」

「まったく……騎士団の演習を見て、騎士団用の道具を作れなくて無茶ですよ。どうせならリクエストをして下さい。要望を出してください。と思うのは私だけでしょうか？」

「そういう案もあるねえ」

「……はあ」

取り合う気のない所長に、雫の口からはため息が漏れる。

本当なら今日は新商品を煮詰めたかったのだが、こういう事態になったからには無理だろう。仕方ないと気分を切り替え、雫は騎士団の演習を目を細めながら眺めた。

「雫君って視力悪かったっけ？」

瓶底眼鏡の奥に隠されている雫の眼差しに気づいた所長が、何気なく問いかけてくる。

「私も人の事は言えませんが、所長も大概変わった人ですね」

これは、よく瞳の動きがわかりましたね、という感心を込めての言葉。

「両方2・0です。所長、アイディアが浮かんだら打ち上げて、許可をもらったら戻っていいんですよね？」

騎士団の演習を見ても楽しみななんて何もない。刺激を受ける事もなく、分野が違つと割り切る雫の頭を、所長はその大きな手でゆっくりと撫でる。

雫が黙っていると、そのまま感触を楽しむように指先に雫の髪を絡め、毛先まで指を通す。

「所長…ほどこかないで下さい」

指先で雫の艶やかな黒髪を弄ぶ為に緩く縛つてあったゴムを取り、ほどけた後はその感触を存分に楽しむ。

「いいじゃないですか。楽しいですしねえ」

相変わらず顔を半分以上覆い隠す長い髪と髭によってその表情はわからないが、かもし出す雰囲気は言葉通り楽しそうで、雫は諦めたように椅子に腰をおろした。

許可がおりたと判断したのか、その後は三つ編みをしてみたり上で結ってみたりと雫の髪を堪能する所長に、雫は所長に見せるように本日何度目かになるため息をついてみせた。

「暑い日じゃなくて良かったです」

でなければきつと、所長とはいえその手を叩き落す程度はやっていただろう。

「その時は魔法で涼しくするから大丈夫ですよ」

何処となく弾む声に雫は縛ってあった毛先を持ち、所長から距離をとる。

「所長。さつさとアイディア見つけて戻りましょう。遊んでないで下さい。後魔法にも興味があります。使えるなら教えて下さい」

雫は頭一つ分以上高い所長を見上げながら言い切ると、後は興味がないとばかりに騎士団の方に集中し始めた。

とりあえず、背中で邪魔するなと語る事は忘れない。

「魔法は後で教えてあげますよ。君の従姉弟殿が見てますね？」

クス、と、後ろから笑みが漏れた音が聞こえた。

「所長は慧が嫌いですか？」

「気になりますか？」

雫の問いに、間髪いれずに言葉を返す所長。問いの答えではなかったが、雫はあえて言及はしなかった。

本音でいえば面倒だったりする。

「所長。防壁を張れる腕輪でも作りましょう。自動で。つけてる人いないですよ？ 結構使えるんじゃないですか」

慧の位置を横目で確認しながら、そろそろ生命維持が必要かな、なんて呟くと、後ろから眼鏡チエーンを引っ張られる感触に眉を顰めた。

「雫さんは、従姉弟殿の生命維持の簡略化する道具でも作りましょうか？」

腕輪は魔法を覚えた後の方がいいと思いますよ。じゃ、帰りましょうか」

「.....」

雫の手を取り、リードするように階段を上がっていく。

「早く帰りたいかった私が言うのもなんですけど、これで良いんですか？」

数人を除いて、雫と所長が帰る事に気づいたのはいない。研究所職員は数十人いて、その中の2人が席を立った所で気づくわけがなかった。

が当然、気づく存在は気づくわけで。

「慧一。余所見ば一つかしない方がいいよ」

そういつて剣を左右へと素早く動かし、慧へと衝撃波を叩き込む。

「うっせーって…これ好きだよな」

衝撃波全てを相殺すると、背後から回り込んだ人物の一撃をもう一つの剣で受け止め、一瞬にして身体を反転させて真正面で迎え打つ。

「女癖が悪くて口が軽くなければいい男なのにな」

残念そうに言われ、ピクリと慧の眉間に皺が寄る。

騎士団に所属してから何かと一緒にいる2人だが、こうして言葉に遠慮がない所は正直どうにかしてほしいと、冗談半分で何度か言った事がある。軽く流されたが。

「ナーダも毒舌じゃなきゃもって人気あるだろ。んでルアルもそればっか飽きるっつーの」

騎士団のトップクラスの2人をあしらうと、慧は両手に持った二振りの剣を構えた。次の瞬間、二振りの剣を素早く動かし無数の残骸を2人に降らせる。これで降参してくれるなら簡単だが、慧もこの2人を相手にこれで済むとは思っていない。

次の手を行動に移す為に、左手に持っていた剣を鞘へと収めると、

もう一振りの剣を左手に持ちもう一度構えの態勢をとる。

「そういえばさあ、あの所長。今まで女性を寄せ付けなかったんだよね。」

「何？」

無邪気に言われたルアルの言葉に、彗の動きが鈍る。

「そうだな。ああ見えて美形だったな。」

ナーダの援護射撃に、彗は動揺を表に出してしまう。そんな隙を2人が見逃すはずがなかったが、持ち前の反射神経でそれを凌ぐと、彗は二振りの剣を鞘へと収め魔法の準備に取り掛かる。

「動揺し過ぎて剣が握れない　か。面白いな。女の敵のくせに」

その態度がほんの少し、ナーダの好奇心に火をつけるなんて思ってもいない彗は、指を指しながら叫んでいた。

「修羅場は一度もない!」

「ナーダの言葉はそういう意味じゃないと思うよお?」

ルアルの突っ込みに、いつものようにうるせーと叫んだ彗の声が響き渡る。

「天宮隼…か」

興味深げに呟かれたナーダの言葉は、慧の叫びにかき消されるように誰にも聞かれず、空気に溶けた。

#### 4話・異世界人の特殊能力？

慧が魔法を使えるらしいと知ったのは、雫が慧の右腕の火傷に気付いた時だった。

「魔法使えるんだ」

小さな声で、ぼつり、と言われた言葉に、慧は動揺を押し込め何事もなかったかのように頷いてみせる。

それが久しぶりの言葉のキャッチボールで、言葉を言い捨てられたわけじゃない雫からの疑問に、打ち震えそうになる喜びを噛み締めながら右手に炎を宿らせた。

「ほら。これだろ？」

この程度の炎を宿すだけなら、詠唱は必要ない。

「へえ。意外」

素っ気無く言われた言葉の意味を考えると、へこみそうになるからそれは考えず、慧は左手に風を宿らせる。

「騎士団は大体二種類ぐらいの魔素を使えるか。俺は規格外みただけど…多分雫もだろ？ まだ、魔法使っていないのか??」

真っ先に魔法に興味を持ちそうな雫が、未だに使った事がない方

が意外だったが、それを言った瞬間会話が終了するのはわかりきっている。

会話終了という地雷を踏まないように、なるべく雫の言葉を聞けるように、慧は自身の脳をこれ以上ない程活動させ、言葉を選んでいく。

「珍しい素材が多くて。研究を優先してた」

相変わらず素っ気無かったが、雫らしい言葉に慧の表情も和らぐ。

「でも、この星の魔素を生命エネルギーに変換する道具を作りたいから、そろそろ覚えるけど」

「……………」

雫の口からさも当然とばかりに紡がれた言葉に、一瞬、慧の脳の活動が完全に停止した。

活動を開始した後にも内容を理解したくはないが、問い詰めた言葉だけだけに、息を吐き出しながらもなんとか気持ち落ち着かせる。

「それって……イメージとしてはどんなの？」

震えそうになる所か、泣きたくなくなるような声音をいつも通りに聞こえるように調整しながら、いつも通りの笑みを浮かべて言葉を紡いでみる。が、雫はその違和感に気付き、静かに溜息を落とした。



容赦なく彗を置き去りにした後、勤務という名の自由な時間を楽しむ。研究所は、個々の研究が盛んで、遊ぼうが何をしようが、最終的に結果さえ出せば全てが許される。

守るべき規律などは騎士団とは違い、大雑把。

そんな自由な立場を利用し、雫は訓練の様子を眺めていた。ただ単に魔法が構築される様を見ているだけなのが、本人が考えている以上に集中していたらしい。

右耳が音を拾った所で漸く気配に気づいた。

「(……確か、彗の同僚)」

騎士団の演習で見た顔。

朱色の色彩を持つ彼は目立つらしく、確か侍女たちが騒いでいたね。などと他人事のように考えた。

「初めまして、か」

すると、雫の無反応に気づいたのか、彗の同僚 ナーダが立っている雫へと微かな笑みを向けた。

瞳を少しだけ細め、唇の端を僅かばかり上へと持ち上げた程度の笑み。

「そうですね」

だが、城では有名人でもまったく興味の対象にはなり得ないナーダに、雫の態度は素っ気無いものだった。

「彗はあんななのに、従姉弟殿は素っ気無いんだな」

何処か関心したように呟かれる言葉に、侵害だとばかりに視線を向けると、

「アレは、病気です。病気ですが、彗の家系だと残念な事に、珍しいわけじゃない」

「彗の家系って…従姉弟の…」

「彗の父親の家系です」

「ああ。つまり父親の家系がたらしの血筋だと」

雫の言いたい事が分かったのか、ナーダの納得した言葉が雫の耳に届くが、その音を聞いていると実際はそこまで興味が無いのだからと思う。

「魔法に興味があるのか？」

熱心に訓練を眺める雫に、同じく訓練を眺めていたナーダの声が届く。

「興味はありますね」

面倒そうに、だが聞かれた事には答える雫に、ナーダは内心笑みをかみ殺す。

彗もある意味律儀だったが、彗の従姉弟である雫も律儀らしい。彗とはまったく似ていない雫を眺めながら、ナーダは次の言葉を探した。

雫自身がナーダに興味を示さないから、次の言葉に迷うのだ。こんな対応をされたのが始めてでそれさえ興味の対象になるのだが、今は観察よりもどうやったら会話が続けられるかに重点を置く。

ナーダのそんな考えを知ってか知らずか、雫はナーダに視線を向けると、

「興味はありますが、もう覚ええました」

一言。

予想さえしなかった言葉をあっさりと紡ぐ。

「覚えた??」

騎士団の中でもその実力は上位のナーダであっても、魔法を使いこなせるようになるのにはそれなりの時間を要した。

「ああ…異世界人の特殊能力……か。そういえば替もあつという間に使いこなしてたな」

そう。

ただ、見てただけで魔法を使いこなした存在を、ナーダは知っている。

それが異世界人の特殊能力だと、内心は複雑な感情を抱えながら、ナーダは見ていたのだ。

だが、ナーダのその言葉に雫はこてん、と首を傾げる。

雫の不思議そうな表情に気づいたナーダも、首を傾げそうになりながら雫を見つめた。

「(まさか…)」

雫の不思議そうな表情に、ナーダの額からは汗が流れ落ちる。

まさか、と思う。

今までの異世界人の大体は、使った事も無い魔法をこの星でも上位な腕前で使いこなせるようになる、というものだったからだ。

だから、替が見ていただけで魔法を扱えるようになったのも、そ

れだと勝手に納得していたのだが、雫の反応を見てありえない事が  
ナーダの脳裏を過ぎる。

だが、やはり雫はあっさりと、さも当然とばかりに淡々とした口  
調で言葉を紡ぐ。

「特殊能力じゃないですよ。多分、慧も」

慧に対して確証はなくても、確信したかのような声音。

「慧も、見て覚えるのは得意でしたから」

それはつまり、2人の間では格段珍しいものではないという事。

「それじゃあ……お前たちの特殊能力って……なんだ??」

風が2人の間を通り過ぎながら頬を撫でていく。

だが、今のナーダに風を感じる余裕はなく、乾いた唇をかみ締め

るよつに業の唇が動き出すのをおとなしく待っていた。

4話・異世界人の特殊能力 ? (後書き)

?に続きます。

## 異世界人の特殊能力？

特殊能力、と言われると困る。何を持って特殊というのが解らないというのが正直な感想。

地球で特殊特殊と言われ続け、隼にとってみたらそれが当たり前だったのだ。例えば場所が異世界に変わった所でそれが変わるわけもない。

「さあ。知らない」

隼の言葉を真剣な面持ちでひたすら待っていたナーダに、あっさりと言い放つ。言われた瞬間言葉の意味を咀嚼しようと瞳を伏せるナーダに、隼は特に何も思っていない眼差しを向けた後、はあ、と息を吐き出した。

「私も　…　慧も、異世界で特殊だと言われ続けて育つたの。こっやって何でもかんでも見れば一回で全て覚えちゃってね。」

だから私は頭を悩ませる、考えられる物作りや実験にのめり込んだんだけど。で、解らない理由は簡単。私は研究。慧はナンパか訓練しかやってないんだから、特殊能力が発動されてもわかるわけないと思うけど」

とりあえず日常生活を続けているだけ。もしかしたら常に発動され続けているのかもしれないが、それが当たり前になれば気付けるはずもない。

口を噤んで何かを考えるようなナーダに対し、正直面倒だとも思いながらも隼はその動きを止めた。何かに気付いた、というか違和感を感じたのだ。

「…そうか。特殊能力じゃなかったか」

ぼつり、と漏らされた声音は沈んでいて、明らかに落ち込んでいる。ここでフォローの言葉をいれる義理はまったくないのだが、自分との会話で落ち込んだ人を見捨てる程人でなしじゃないかなあ、という曖昧な感想を抱きながら、雫はジィと違和感を探るようにナーダを見つめた。

瓶底眼鏡に阻まれながらもその視線に気付いたのか、ナーダは怪訝な表情を浮かべて雫を見上げる。

「何だ？」

「ちよつと待って…：…何だろう。違和感？ 貴方の魔法って闇と氷…？」

この世界の魔法というものの種類は、それこそ山の数ほど存在する。細々とした属性に種類。それを把握出来る書物は今の所存在はしてないという事。

だから雫も知っているわけではないのだが、ナーダを取り巻く闇と氷の気配に思わず尋ねていたのだが、その瞬間ナーダは立ち上がり雫から距離を取っていた。

「ツ…何故」

道具や武器で自分では使えない魔法の属性も使えたりする状況で、ナーダは自分が闇を使えるという事だけは誰にも教えないでいた。

血縁者ですら知らないナーダの事実。

それを、雫は言い当てたのだ。

「何となく。映像が見えたっていうか…魔法が使えるようになった

「からかな？ 見えるよ」

訓練の様子を眺めながら、雫が口元へと笑みを貼り付ける。それに背筋が寒くなりながらも、ナーダは眼を離す事が出来なかった。

口元へと浮かんだ笑みが、綺麗だったからだろうか。

ふと、そんな言葉が脳裏を過ぎる。

「ちよつとこつち来て」

距離を取ったナーダを言葉だけで呼び寄せるが、何故かそれに逆らう事は出来ずにナーダは雫の前へと立ち見下ろす。雫と同じ年には見えない小柄な雫。

「ああ。違和感はこれだね。貴方を取り巻く闇と氷の他に、何かが身体から出たがってる」

眼鏡を散漫な動作で取った後、細部まで見逃さないようにじっくりと観察するような眼差しをナーダに向ける。すると、取り巻く闇と氷の他に、何かが内に留まっている事に気付いた。

「何か…というか、眼鏡…」

整い過ぎている顔立ち。身体の体型を隠すような衣装を身につけている所為か、パツと見はわからないがよく見ると分かる。均整のとれた体型。

この世界では珍しい黒の髪と瞳。ナーダが使う漆黒の闇もこうだったらいいと、その色彩に目を奪われる。

「…闇に走る閃光。うん。閃光だ。出ておいで」

だが、ナーダの戸惑いには気付かず雫はゆっくりと手を伸ばした後、肩辺りを撫でるように手を滑らせた。

「え……」

戸惑ったナーダの声が響いた。

「とりまくのが、一つ増えた」

雫の捕らえる世界で、ナーダの内から出た閃光が闇や氷と同じように取り巻くのを満足そうに眺める。

そんな雫につっ込んでいいのか、それとも内に宿る力が増えた事に驚けばいいのか。ナーダにしては珍しく平静さを失い驚愕の眼差しを向けた。

「一体：何を？ 俺の魔法が増えた……」

身の内に宿る力を間違えるわけがない。

「推測だけど、貴方自身日々の訓練で魔法の種類が増えそうだったんじゃないかな」

「……大体は、二種類ぐらいの魔素だったんだがな」

「所詮大体でしょ。何事も例外はあるものよ」

あつさりと言つてのける雫に、ナーダはある種の確信を抱く。

「（特殊能力の一環……か）」

そう。一環。これが全てだとは思えず、他に何かがあるのだろうとは思つてしまえる。それが雫と話した感想であり、ナーダの想像の範囲を超えた天才というヤツだろうと実感する。

「……多分、貴方が殺す気でいったら、彗は貴方より弱いよ。彗は私と同種だけど、私よりは弱い。そして、貴方が闇の力を使いこなせるなら、彗は貴方には勝てなくなる。彗が天才といつても、貴方も同じ天才だから」

「……ッ!？」

今度こそ、絶句した。  
言葉を失い、雫を凝視してしまう。

ナーダの劣等感に気付いていたのか。それともこの短時間で見破られてしまったのか。わからないが、不快ではなかった。

「俺の劣等感によく気付いたな」

それでも、どうして見破られたのか聞いてみたくて、思わずそんな言葉が口から出ていた。

「何となく。普段はこんなお節介面倒だし研究の時間が減るから絶対やらないんだけど。慧の女性問題で迷惑かけてる一人だから」

だから、珍しくお節介をした。と言外に言い切る雫に、ナーダの胸が痛みを訴える。やはり従姉弟は特別なのかと、別の意味で思考に翳りを帯びさせた。

「それ…不快な勘違い。慧のお姉さんは好きなの。そのお姉さんから、自分がいない時はお願いって頼まれただけ」

つまり、今は自分が慧の保護者役になっていると、整った顔立ちを顰めて言葉を吐き捨てる。背後にはオドロオドロしたものを背負ってそうだったが、ナーダの心は理由もわからずに一気に軽くなった。

思考を読まれていたのだが、今はそれも気にならない。

「まあ…いい。俺はナーダ。困った時は俺を頼ればいい」

今回の礼だ、と連絡用のカードを雫へと手渡す。

「俺の生まれ故郷ではここでは手に入らない珍しい鉱石があったな。俺なら、許可を取らずに案内出来て尚且つ採取も可能だ」

礼なんていらぬ、と突っ返される事は予想内。それに先手を打って、ナーダは自分の生まれを存分に活かす事にした。予想通り、カードを受け取る前に突っ返そうと手の平を向けていた雫は下を向き、カードを手に取りそれに視線を落としている。

「鉱石……」

「ああ。媒体に出来る鉱石だ。ちょっと特殊だな　　が、アンタなら面白い結果が得られるかもな」

「ふうん。わかった。今は持ってないから今度会った時渡すから」  
連絡用のカードをナーダとは違って持ち歩いてはいないのだから。外部と接触しない票にとつては本来なら不要かもしれないカード。だが、それを渡すと宣言した後、もう一度ナーダを見上げる。

「私は天宮雫。さんとか、敬称はいらないから。私も呼び捨てにするし」

「ああ。俺も苦手だ。助かるよ」

ある意味次回の約束を取り付け、ナーダは無意識に口元へと笑みを貼り付けていた。このカードは一方通行では意味がない。相手と交換しなければ連絡の取り様はないのだ。

「……そういえば、カード専用のホルダーがあるのは知っているか？  
交換すればした分だけ枚数が増えるカードには、やはり専用のホルダーがあるのだ。出なければ連絡をしたり来たりする度に山ほどのカードの中から探さなければならぬ。」

「知らない」

「そうか。雫さえ良ければ、俺が暇な時に案内するがどうする？」

「……じゃ、お願いする」

「ああ」

思案するように視線をさ迷わせた後頷く雫に、言葉の選びは間違っていないかったと、心底安堵しながら表情全体で笑みを形作った。

## 5話・非日常の二つま

他愛もない日常の風景。

当たり前すぎて素通り出来てしまうような。

そんな気に留める価値もない程の空気に溶け込んでしまうかのよ  
うな場面。

なのに。

慧にとってみたらソレは日常ではなく、非、日常だった。

従姉弟でありながら慧にとっては特別な。他と比べる事など出来  
ない程の存在である雫。その雫が、ナーダと楽しげに言葉を交わし  
ている。

一見その表情は変わらないように思える。だけど慧にはわかって  
しまう。その表情が実は、雫が楽しい時に浮かべるものだという事  
に。

一瞬足元が崩れ落ちたような感覚に膝から崩れ落ちそうになるが、  
手を伸ばせば届く位置にあった壁に手を叩きつけるように当て、身  
体を支える。

こんな事で倒れてなんかいられない。

たとえ、それがどんなに衝撃的だったとしても。

「その鉾石ってどういふのがあるの?」

「色はこれ、というものはないな。属性の数だけあるといってもいい。魔力が籠められている物もあれば、何も無い物もある」

「へえ……まっさらなものがあるって事ね」

「ああ。媒介に出来るんじゃないかと研究する者もいるな」

「ふうん。面白そう。あ……そういえばカード」

そう言っただけを取り出したものは、一枚の透明なカード。特殊な文字が彫られ、それが雫のものだとわかる印にもなっている。

これで受け取った相手のカードを使い、連絡を取れるのだ。ナーダ自身誰かとカードを交換する、という事は基本的にしない。

家族や、休日でも会うような友人に渡している程度だ。その光景を見ていた慧自身、ナーダからカードは受け取ってはいない。大体が騎士団詰め所で会うからなのだが、それでも目前に広がる信じたくない場面に、流石の慧も言葉を失った。

「（………何時の間に仲良くなったんだ……？　そういえば最近雫に会ってない。会ってないけど、別に珍しい事じゃないし、雫はよく籠るからそれを邪魔されるような携帯は好きじゃなくて……）」

ソレは、ナーダも同じだった。はず。

「慧……。眉間の皺……。ナーダとか、慧の従姉弟殿とかの珍しい態度にやられちゃってるよねえ……。珍し」

「………」

何処から現れたのか、ルアルが口元に笑みを称えながら慧の後ろからひよっこりと顔を覗かせるが、あえて無言を貫き通した。あえて、というよりは、何を言っていないかわからないだけだった。

人の感情に対して敏感なルアルは、その様子を満足気に眺めながら1回だけ頷くと。

「それ、慧にふられた女の人がよく浮かべてる表情だよねえ。慧はねえ、従姉弟殿がいなかったら今頃刺されてるんじゃないかなあ」

表面上はにこやかに。目元は弧を描き穏やかな表情を浮かべているようにも見える、が、それはあくまでも見た目だけ。

実際はそれとは正反対な性格だという事を既に理解している慧は、嫌そうに目を細めながらルアルを見下ろした。

「あはは。慧もナーダも友達だからねえ。まあ、フェアにいこうよ」  
「…つまりそれって…いや、うん。いいや。あの表情見ればわかる」  
ルアルから釘をさされた形になったが、慧自身特に何かをする気はなかった。

「あれ、素直」

「お前って本当に心底性格悪いよな」

最終的に収めるつもりでも、それまでの多少のいざこざなら面白がつて見るタイプだ。剣や魔法では慧やナーダに勝てなくても、別のジャンルならルアルはほぼ無敵だろう。

「褒め言葉嬉しいなあ」

「褒めてないけどな」

それについては即座に切り返す。

やはりルアルは面白そうに笑うだけだが、その声で雫が慧のいる場所を見上げた。久しぶりに向けられる視線。

「あ。居たんだ」

その唇から紡がれた言葉はこの上なくあっさりとしたものだったが、それでも雫の視界に収まった事が嬉しくて慧の表情から笑みが漏れた。

地球に居た頃は当たり前だった会話。

ここに来てからは当たり前ではなくなった邂逅。

前よりもずっと貴重になってしまった雫との対面。

「騎士団の演習場に俺がいてもおかしくないだろ」

「それもそうだね」

慧の言った言葉にそれもそうだと雫が頷く。その後はナーダに視線を移し、機嫌の良さそうな笑みを浮かべてナーダへと話していた。聞こえる会話は決して艶めいたものではなく、寧ろその入り口にす

ら立っていないもの。

雫の研究者魂を刺激する鉱石の数々に、話題は尽きる事はないらしい。

「長そうだねえ」

「そうだな」

長いんじゃないくて、これは尽きない。

慧の姉と雫が話す時は、大体がこういう感じになっていた。その都度、慧は会話に入れずにただ楽しみに言葉を交わす雫と姉を見ているだけだった。

どうやらその立場は、ここでもかわらないらしい。

「あんなに遊び相手がいるのに、本命に人が近づくのは嫌なんだねえ」

ルアルの底知れぬ笑い声と共に、スルリ、とそんな言葉が慧の耳に入り込む。いつもだったらその言葉を発したルアルの表情を横目で確認するのだが、何故かそれが出来ずに慧はただ下を見下ろすだけ。

見てはいけないと、本能が警告したのかもしれない。

「あ、残念。僕の素敵な笑顔が見れたのにねえ」

「見たくねえよ」

ルアルの邪悪な笑みなんて、頼まれても見たくない。思わず見ないように左手で目を隠すように覆うと、息を吐き出すだけの溜息をついた。

「俺に恨みでもあつたりする？」

今日のルアルは中々のものだ。普段は猫を被ってはいるが、ここまで自分を出すのは珍しい。思わず聞いてしまえば、返ってくるのはルアルの無邪気に聞こえる笑い声だけ。

声だけ聞くと可愛い少年。

既に中身を知っている慧としては、含みがあると思えない声。

「ううん。まっさかあ。ただの観察」

「…そうか」

わかつてはいたが、はつきりと言われると更に疲れが増すような気がして、彗にしては珍しく肩をがっくりと落とした。

今まで感じた事のない疲れの所為か。彗にしてはその態度以上に珍しいのだが、雫の視線には気付かずにただ頂垂れるだけ。

「どうした？」

何かを観察するような。一瞬ルアルを彷彿されるような眼差しだが、あえてそれには触れずにナーダが尋ねると。

「彗のあんな態度、初めて」

「そうなのか？」

確かに頂垂れる彗は珍しいかもしれないが、雫に対してはよく落ち込んでいるから然程珍しさも感じさないナーダに対し、雫は迷わずに頷く。

「法則さえ見つければ帰れる。迷いすぎた人間が落ちた先が異世界。ああ、うん。法則は彗なんだ」

ぶつぶつと呟く雫。

「……つまり、きつかけは彗ならば、帰る法則も彗、なのか？」

「まだ確信は得てないけどね。ねえ、ナーダ。この世界の、神隠しの目撃情報ってある？」

確信はないという割りに、迷い無く言葉を口にする雫を視界へと収めながらナーダが1回だけ頷く。

「それ、私でも見れる？」

「いや、それは大丈夫だ。俺が見せよう」

気になる言い方だが、雫はあえて突っ込まずにナーダの言葉に甘えておく事に決めた。元々、この国は異世界人に対してかなり優しい。勿論非人道的なものや犯罪は裁かれるが、本人が帰る為の手段を調べる為ならば、余程の事が無い限りは資料を集める事に手間取る事はない。

しかも、雫自身研究員として数々の発明し、既にこの国所か他国

でもその発明品は無くてもならないもの。そしてその性格から信用度はかなり高いのだ。その雫が見たがり、ナーダが補佐をすれば無理な事はほぼないと言える。

「ありがとう」

くすり、と笑みを漏らす雫に、ナーダは首を軽く横に振る。

「いや。この程度は造作もない……」

多分、珍しいのは。

変わったのは彗だけじゃないんじゃないか。

「（と俺が思うのは、まだ早いか）」

先日までは彗の従姉弟、という認識だったのだ。

それなのに、変わったと言い切るのはまだ早いかと、口には出さず胸の奥に留めておいた。

## 6話・彗の暴走

研究が佳境に入ったのか。

雫の集中力は途切れる事を知らない。

この時に声をかけるような存在は、研究所には存在していない。皆が皆集中に入った時には話しかけられる事を嫌うからだ。

そんな研究心の塊が集った場所。多少所かかなりのマニアックな分野まで極めようとしている面々がいる事も否定は出来ないが、それでもここは国の中枢である研究施設。優秀な面々がいるからこそ、ここから生み出されるものは国の利益になる。

そんな癖のあり過ぎる研究員たちを纏める所長。

常日頃から所長と呼ばれ、長年勤める研究員すら本当の名は知らない。

身分も何もかも取っ払える、ある意味コネとは無縁の完全実力世界。所長が何処の誰であろうとも、ここを纏める器があれば関係ないのだ。

そんな彼の最近のお気に入りは、異世界からの迷い子と呼ばれる雫の存在だった。彗も天才と呼んでも差し支えないが、それでも雫がいればその天才すら霞む。至高の存在である雫を前にすれば、この世界の誰もが霞んでしまっうんじゃないかと思えてしまっう。

ここに来たばかりの頃は研究だけ。

自身の知的好奇心さえ満たせばいい、と言い切っていた彼女の变化。

極僅かな変化はきつと、従姉弟である彗ですら気付いていないだらうと所長は思っていた。

態々伝える気はないし、伝えるような間柄でもない。それに、慧の近くにはルアルがいる。ルアルならば雫と接点はなくとも、この些細な変化ですら見逃さないだろう。ただ、彼は観察者。彼も自身の興味を優先させる傾向にあり、その為には多少場を整えたりもするが、今回の件については見ている事を優先させるだろう。

まあ…ほんの少しだけ、慧をチクチクとさす事は忘れていないよ  
うだが。

研究所の様子を端から端まで眺め、所長は静かに部屋を出て行く。  
数十年前になるだろうか。

所長は、このパターンを見た事があるのだ。雫や慧程の天才児ではなかったが、男の方が原因でここに落ちてきた男女2人。

男が素直になった瞬間、元の世界の道が繋がった。

空間を歪むほどの素直ではない男の感情。興味深かったが、それ以上に面倒だった。故に、関わり合いにはならずに傍観者でいたのだったが、その時知識がこうして役にたつたらしい。

詳しい話しを雫から聞かなくとも、そろそろ道が繋がりそうだという事がわかる。

面白いと思っただけの観察対象。

そんな雫が、もうじき元の世界に帰る。

一つのレポートの完成が見えているのに、何故か嬉しくなかった。不可思議であり厄介な感情に、思わず重たいため息が漏れる。今日は研究を進められるような気分じゃないと、外を眺めながら脳裏から全ての思考を追い出していく。頭をまつさらにし、思考を正常な状態に戻す。

きっと、今日はそれで潰れるだろう。だが、そんな初めての思考も良い経験だと、所長は開き直る事に決めた。

「……久しぶり、です」

だが、そんな彼の耳に届く声。  
まだ幼さが残るものの、低めの声は女性を虜にするのだろう。

「ああ。久しぶり、だね。君が声をかけるなんて珍しい。明日は槍でも降るのかな。それもいいな。いい研究になりそうだ」

「アンタに声をかけるといつもそうだな。話しが逸れる」

所長のいつも通りの態度に、苛つときたのか声をかけた男 ナ  
ーダが嫌そうに顔を歪める。

「態とだよ？」

「知っているから苛々とした」

「そうだろうね。栗さんの事かな？ 君が気付く程、彼の変化はわかりやすかったのかな。その段階までくるとなると、栗さんが法則に気付くのは遅くて一週間。でも栗さんだからね。明日には気付きそうだね」

つらつらと言葉を連ねる所長に、ナーダのいらつきが増す。

しかも、全てを分かっているかのような口調も苛々する。かつて世話になった事は否定しない。しないが、それを差し引いても苛々としてしまうのだ。

態とやっているであろう所長の態度。

わかっているからこそ、苛々としてもソレを表にだすような真似はせず、ナーダは落ち着かせるように息をゆっくりと吐き出した。

「ああ。栗の事だ…が、今の言葉で十分だ。そこまでわかっていれば、俺はこの世界で彼女の興味をひきそうなモノを紹介するだけだ」  
「そうですね。彼女を引き止めるには。もしくは帰ってきてもらうには、それが一番いいかもしれませんね」

「……俺も、栗を引き止める為のコマ、か。アンタは、相変わらず表立っては行動しないんだな」

そう。相変わらず。ナーダにとって所長と呼ばれる男は、知り合った頃からそういう男だった。世話になった事もある。だからこそこれ以上は何も言わないし、聞きたかった事は聞けたからいい。

「別にいい。アンタはアンタで動くんだな。雫を引き止める為には……おそらく、アンタの知識も有効だ」

吐き捨てるように言つと、もう用はないとばかりにナーダは所長に背を向けその場から立ち去る。ものすごい速さで遠ざかっていくナーダの背を眺めながら、所長は何とも言えないような、複雑そうな表情を浮かべ空を仰ぐ。

自分の知識こそ雫にとつて興味のひかれるもの。そんな事は言われるまでもなく知っている事だ。だが、知っていると同時に不安もある。研究所の所長として身に付けてきた技術と、元々持っていた個人の素質。

それらを、雫は全てくろう事が出来るのだ。

引き止める為に全てのカードをきるわけにはいかない。小出しにする必要があるのだが、まどろっこしい事をやれば雫はソレを切り捨てる。

難しいんだよ。と、心細ささえ感じるような音が、誰にも拾われずに通路に響き渡った。

目の前には大量の紙の束。

雫は記憶に残されている情報。つまり、この場にきた経緯を全て紙に書き出していた。普段だったら紙に残す事はしないのだが、一から整理したいという事で珍しく書き出してみた。

書き出した事は雫だけの知識じゃない。今まで得た証言。彗にふられた女性たちの変化も書き留めていた。

ひよつとしたら落とし穴と呼ばれる場所にいたあの男にだったら会えるかもしれない。

魔法を覚えた事も大きいのだが、それよりもやはり彗の変化の方が重要なのだろう。彗の変化が、雫を覆っていた不可解な膜のよう

なものを溶かしていく。

この膜が地球との繋がりを絶っていたというならば、これさえ消えてしまえば戻れるのだ。地球に。

ガリガリと休憩する事無くペンを走らせていたが、実はほぼ確信は得ている。感覚的なものだが、間違いないだろうと雫は思っていた。だが、まだ慧にこれを言うつもりはない。慧の無意識の変化が、意識的に止められてしまえばどうなるかわからないのだ。

そう思っていたのに、ガラリ、と無遠慮に開けられた研究所の扉。防音の効果を施された室内に、外の音が響いてくる。

「慧」

逆光になっているが、このシルエットは間違いなく慧。

「雫」

珍しく切羽詰った声。

「研究中」

それに、いつも通りに返してみたが、慧は構う所か研究室に足を踏み入れ、座っている雫を上から見下ろす。

口は堅く結ばれ、瞳は自信なく揺れている。

珍しい。本当に珍しい。ここまで余裕のない慧を見るのは、雫ですら初めてじゃないだろうか。

「雫。帰ろう！ 今すぐ帰ろう！ 地球に帰る！！」

雫が黙っていると、余裕のない慧は周りも気にせず叫ぶように言葉を吐き出す。

「どつやって？」

その鍵は慧だけだね。とは言わない。

「俺だろ？ 俺が迷い人だろ？ なら、もう帰れるじゃないか」

自信なさげに揺れていた瞳は何処にいったのか。今は明確な意思を瞳に宿し、慧は雫の肩を掴むように手を置く。

「鍵は俺だ。俺の異世界人の特殊能力は転移だ。俺が望めば、地球に帰れる。だから、直ぐに帰る！」

「慧。落ち着きなさい」

直ぐ、なんて無理を言うなど、視線は冷ややかになる。

お世話になった人たちへの挨拶や片付け。そういったものがあるだろうと呆れたように溜息を落とせば、雫の肩を掴んでいる慧の指先に力が入った。

「悪い。俺は、雫をここに置いときたくない。俺が嫌だから、もう帰る」

だが、珍しく我を忘れているなあ、何て呑気に思っていたのだが、どうやら暴走していたらしい。

認識が甘かったと、雫は慧の手を払いのけようとしたのだがそれより先に、自分の身体に衝撃が走る。

通路を走る音が耳に届いた。

視界が歪む寸前に音の方を見てみれば、扉に手をかけた所であるう所長とナーダ。

ああ。彼らには世話になったのに。

無意識に手を伸ばせば、その手は慧の手によって絡め取られ、こつん、と額が慧の胸に当たる。どうやら抱きしめられたらしい。

その感触が最後だった。

雫と慧はその瞬間この世界からきり取られ、歪む視界が戻る頃には慣れた風景が目前に広がる。

下を見れば、雫の格好は制服。

前にはあの時と同じく慧の姿。こちらも制服だ。

「…………唐突過ぎる」

肩を上下させている慧を視界の隅に捕らえながら、雫は思わず、ポツリとそんな言葉を漏らしていた。

## 7話・エピソード

異世界の出来事がなかったかのように、地球ではいつも通りの日々が戻ってきた。

勿論、母親に異世界の事を聞くのも忘れず、兄弟たちからは日々どんな事があったかと聞かれたりもしたのだが、それでも雫の日常は変わらない。

もし、変わった事をあげるとしたら一つ二つ…だろうか。

「雫。一緒に帰ろう」

変化一つ目。雫の女癖の悪さが一切なくなった。

どういふ心境の変化なのか、雫にはわからないがそれでも、泣く女性が減ったのは良い事なのだろうと思っている。

「別にいいけど。寄り道しないから」

特に会話があるわけじゃないのだが、雫は毎日毎日こうして雫の元を訪れる。害があるわけじゃないから特に気にはしないし、通学の時限定だからほっておいたりもしているのが本音だ。

「知ってる知ってる。で、どうせ今日も行くんだろ？」

「うん」

変化二つ目。

予想通り、雫の特殊能力は消えないまま、今も身に宿っている。それは慧も同じで、雫程自由ではないがあの世界と地球を行き来出来るのだ。

今では兄弟たちも連れて行って特殊能力を身に付けているのだから、つくづく天宮の血筋は規格外だと思えてしまう。

この規格外を本当の意味で理解出来たのは、慧ではなく雫自身の変化なのだろう。

緩やかな。けれど確かな変化。

慧と雫の関係も、一方通行ではあるしまったく気付かれてはいないが、あの時のような余裕のない状態には突入しない。

「(ナーダとかと会ったのは、やっぱり嫌なだけでさ)」

雫自身はまったく気付いていないけれど、地球に帰ってきた直後、慧は振られたのだ。雫に気付かれてはいないのを良い事に、未だに片思いを続けていたり足掻いたりもしているのだが、この状態が辛いのかどうなのかがいまいち分からぬ。

女性問題を全て片付けた後、振られたのに距離が近くなった気がするという複雑な気分を味わっているのだ。

あちらでは所長やナーダも足掻きつつ、地球で慧が近くににいる事に悔しい想いをしているならお互い様だが、まだ溜飲は下がる。

一方的に悔しい想いをしていなければいいのだ。

「今日は俺も行く。騎士団の訓練があるんだよな」

「ふうん」

二重生活がいつまで続くのか。

雫がどんな結論を出すのか。

「今度外に行くっていつからさ。面白いものがあつたら採ってくるけど」

興味なさげな雫に一石を投じてみる。すると、きらり、と雫の瞳の奥に興味の光が宿った。予想通り食いついた。

「…いる？」

「いる」

ナーダなら何も言わずに差し出すのだが、彗は違う。これも、ちゃんと雫の興味を引くモノとして利用するのだ。

「オツケー。採ってくるよ」

「ナーダと被らないようにちゃんと話してね」

「…オツケー」

どうやらナーダは元から数に入っていたらしい。思わず脱力したように肩を落とした彗だが、雫らしいと気分を切り替えた。

家に帰って服を着替えて。騎士の衣服はあちらに保管してるので、態々地球からは着ていかない。もしここの住人に見られようものなら、ただのコスプレだ。

流星にそれは辛いと、彗は口に出さないまでも地球である格好はしないと、固く心に誓っていた。

雫は不思議そうに見ていたが、幾ら大好きな相手が全然平気だといっても彗の羞恥心はなくなりはない。

寧ろ、雫が興味なさ過ぎなのだ。

「雫。着替えたらすぐ行くから、家で待ってるよ」

「ん？ 自分で行けばいいんじゃない？」

「俺の魔力は雫に比べて極僅かなんだって。雫が行くならつれてっ

てくれるとすっげー嬉しい」

ちらり、と見てみれば、考え込むように顎に手を持っていく雫。心の中でガツポーズをしながら、ひたすら雫の返答を待つ。

「しょうがない。いいよ。10分以内ね」

「勿論」

即決で断らなければ、断られないのだ。

珍しくにんまりとしながら、雫は雫から空へと視線を移した。

今日の天気は良い。まさしく晴天。これだけでいい事がありそうだな、なんて単純にそんな事を考える雫の隣で雫が。

「（この陽気のせいで頭の螺子が飛んだかな）」

と、にやけ面の雫を見ながらそんな事を考えているなんて知らず、雫の表情は晴れ晴れだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3609m/>

---

刻と世界と狭間の果てに

2011年4月26日20時12分発行